
Pianissimo Rhapsody

恋町小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Pianissimo Rhapsody

【Nコード】

N2109Z

【作者名】

恋町小路

【あらすじ】

実らぬ恋に身を焦がす黒崎一樹はピアニストの卵。兄一樹を慕う妹の来夏は兄に近づく存在を許さない。一樹に告白したクラスメイトの結城芽衣。禁断の愛に魂を捧げる少女、桂木琴音。そんな恋愛事情に巻き込まれる少年、連城界。幼い殻を破り、彼ら少年少女達は成長していく。中学生の若者達を中心に繰り広げられる青春模様を描きます。

(1) 告白

ただ一人の人を想うあまり狂ってしまえたらどんなによかったらう。

漠然と繰り返される無意味な日常の中で、彼の存在は唯一、私がそこに在ることを自覚させました。

二人は一つで一つで二人。

近くに在って遠い皮肉な関係。

どちらが欠けてもいけないのです。

私達は生まれたときから、お互いに足りないピースを持って生まれた双子同士なのです。

お互いが重なれば、ほら、私達は一つなんだ。

あの日、私はパンドラの箱を開けてしまいました。

悪魔の誘惑に負けて、否、誘惑を望んだのは誰だったのでしょうか？

その少女の身を包むのは黒。

その手と姿が形造るのは祈り。

その古びた礼拝堂の窓際のステンドグラスから差し込む光がその姿を浮き彫りにする。

幻想の色彩の中で跪いている少女は手を合わせ、目を瞑っていた。

『主よ私は罪を犯しました。』

あの人を愛することを知った私は禁断の果実を口にしたのです。

罪は罰せられなければなりません。

どうか主よ、私を罰してください。

この身は穢れているのです。

どうか主よ、罪を背負った子はどうか償えばいいのでしょうか。』

だが、祈りに神は答えはしないのだ。

(シーンが切り替わる 現実時間へ)

一四の誕生日を迎えたその日、来夏は愛を告白する決意をした。実の兄である一樹は来夏と同じ年で双子だった。

生まれてからずっと同じ家で育ち、何をするのも一緒だった。

いや、何もかも一緒だったのは昔のことだ。

今はすれ違うだけの毎日。

それを元通りにするのだ。

いや、それとも壊すのだろうか？

静かな部屋で物思いに耽っていた顔を上げると、制服の肩口から長いさらさらした髪が流れ落ちていく。

屋根裏部屋の窓から夕暮れの曇った空を見上げた。

最近は何ばかり降っていて気温もあまり上がらない。

湿気を帯びた空気を吸った来夏は額に携帯の背を当てた。

ひんやりとした無機質な冷たさが額に広がる。

気持ちを伝えるのだと何度も溜息をついてから一時間を費やして、ようやく携帯の番号を呼び出した。

プルル、プルルル、耳元で聴く呼び出し音が遠く長く感じる。

「こちら留守番電話サービスセンターです。ご用件のある方は……」

来夏は空気をすべて吐き出してから呼吸して、受話器を握りなおす。

「兄さん、来夏です。明日なんだけど。一緒に帰らない？ えっと、特に用事は無いんだけど…お父さんの誕生日が近いから相談したくて。」

己の滑稽さに震えながら、来夏はただそれだけを伝えて電話を切った。

兄の一樹と直接話して伝えなかった。

一緒に帰ろうなんて、小学生みたいな言い訳だった。

自分自身に憤慨して肌触りのよいクッションを顔に押し付けると、ベッドの上に横になった。

干した布団の匂いと柔らかさを感じながら、時計の針の立てる音がやけに大きく響いた。

耳を済ませて階下に聞き耳を立てる。

旧家の屋敷は明治から変わらず、華族の時代華やかかりし頃から存在する、まさにお屋敷という存在だった。

黒崎家には専属のメイドが何人もいて、代が代わっても仕え続ける使用人達がいた。

いつもはこの時間になると、中敷という老婆とその孫娘のメイドが残っているだけだった。

中敷が一番古い使用人で、黒崎家に仕えて四〇年だという。

母親に代わって、今の黒崎家を取り仕切っているのは中敷だった。

来夏が小さい頃からこの老婆は老婆のままだった。

本当はいくつなのだろう？ 七〇だったか八〇なのか、忘れてしまった。

下からは何も聞こえてこない。

目を閉じて、来夏は柔らかいクッションを頭からかぶった。

心地よい感触にぼうつとしていたのか、いつの間にか睡魔に身を

任せて眠っていた。

夕暮れ時の弓道場は暗く人気もない。

板張りの床を軽く軋ませて、一人の学生服姿の少年、黒崎一樹が姿を現した。

一樹は失礼します、と儀礼上の挨拶をして道場に踏み込んでいた。静寂に満ちた空間にガタリ、という音が木霊して一樹は顔をそちらに向ける。

清廉な稽古場の雰囲気を残した道場にたった二人の生徒だけが取り残されている。

夕日を遮るように一人の少女が一樹の前に立っていた。

「結城さん？」

「黒崎君……来てくれたんだね」

祈るように両手を胸に当てた結城芽衣が言葉を吐き出して、一樹は顔を上げる。

結城芽衣、というのがこの少女の名前だ。

一樹のクラスメイトで弓道部に所属している女の子だった。

普段の関係は可もなく不可もなく、普通のクラスメイトの範疇を越える関係ではなかった。

その彼女が一樹の机にラブレターを俵ばせてきたのだ。

無視するわけにも行かず、手紙を読んで、会うことを決めて道場までやってきたのだ。

後には引けないぞ、と自分を奮い立たせて戸を開けて、今ここにいた。

「えと、こんなもの貰っちゃったしね」

鞆に入れたラブレターを取り出し、それは白く一樹の手の中で映える。

「読んでくれてありがとう」

緊張気味の芽衣が頭を下げて、ツインテールにした髪が揺れて落ちる。

ほのかにその頬が染まっているのは夕日のせいだけではなかった。その姿にドキリとして一樹は躊躇いを覚えていた。

これから振る相手である。

期待させて打ち落とすような真似を自分ではさせてしまったのではないか、という思いが一樹の舌を鈍らせていた。

結城芽衣は最近特に男子で話題に上がる少女だった。

格別の美少女ではないが、健康的で、可愛らしい容貌が特に受けていた。

性格は大人しめで控えめなところも人気の一つだった。

当の一樹といえは、ピアノの稽古と練習ばかりで女の子との接点など、同じクラスメイトでもなかなか持てるものではなかった。

「あのお、ええと……」

口ごもる芽衣、一樹には彼女の言いたいことはすべてわかっていた。

その想いを綴った手紙は一樹の手の中にある。

悩んだ末にどう伝えるか、という答えを言わねばならない。

「ありがとう、ってまず僕からも言わせてください」

「え？」

「この手紙を読んで、結城さんの気持ちがすごく伝わってきて、僕なんかをそう思ってくれてるのがとても嬉しかった」

芽衣が一樹の言葉を一句一句聞き逃さないように、じいっと一樹を見つめている。

その視線に耐えかねて、一樹は赤く染まる道場の白砂に視線を投げていた。

「でもごめんなさい、君とは付き合えない」

息を呑む動作が伝わって、芽衣の顔が歪むのがわかった。辛うじて震える声を絞り出して一樹に問いかける。

「それって、駄目な理由って訊いちゃ駄目ですか？」

「いや、その話すよ」

正面から彼女の顔を見つめて、芽衣の視線を受け止める。

「大きなコンクールがあるんだ」

「……音楽のですね？」

「うん」

一樹は自分の両手を広げて眺める。

その仕草を追うように芽衣の視線が一樹の手に向けられる。

この手でやり遂げなくちゃいけないことがある。

そう決めたんだ。

脳裏に一人の少女の顔が思い浮かぶ。

一樹の片割れ、もう一人の自分、越えなくてはいけない存在。

「来年、僕達は三年生でその先の進路があるだろう？ コンクールの結果次第で外国留学が決まるかもしれない」

「すごい……外国に行くんだ」

「まだ決まってるじゃないし、結果を出してない」

「行くとしたらウィーンとかですか？」

なけなしの音楽の知識で芽衣が尋ねて、一樹は頭を振った。

「まだわからないんだ。先生とも相談しなくちゃいけないんだけどね」

「ごめんなさい……あたし、黒崎君が大事な時期なのにあんな手紙出すなんて」

うなだれる芽衣。

大事な時期、というのは本当で、今日もこうして告白を受けなければ、ピアノ教室に直行しているはずだった。

かけて上げられる言葉は見つからないまま、一樹は無難な言葉を選んだ。

「そんなことないよ。本当に嬉しかったし、結城さんみたいに可愛い子に好かれてるなんてありえないって思ったもの」

「アハ、そんなこと言っと脈ありだって思っちゃうよ？」

「そうだね、ごめん……」

頭をかく一樹にめーっという仕草をする芽衣。

「ごめんなって言わないで。羨ましいなあ外国行けるなんて、それに相手がピアノじゃあたしも適いっこないし。でも、あたしの告白、ちゃんと訊いて下さい」

「うん？」

指先で一粒大の涙を拭いた芽衣が顔を上げ、改めて一樹に向き直る。

「黒崎君、あたし結城芽衣は黒崎君のことが好きです。ううん好きでした。たった今振られちゃったし。

でも黒崎君の目標というか、目指してるものを知ってまた好きになっちゃいました」

芽衣が微笑んで、道場に舞い込んだ風に数本の髪が揺れて唇に絡む。

それを芽衣は指先で梳いて流した。

芽衣の想いと言葉は風がさらって一樹の中に浸透していく。

「えと……」

正面から二人は見詰め合っていた。

日が沈む一歩手前、夕暮れ時という今しかない時間。

その瞬間の貴重な空間を二人だけで共有している、そんな不思議な感覚が二人を包み込んでいた。

(2) 初めてのキス

ふと芽衣が片手を差し出した。

立ちっぱなしの一樹の前に進み出て、ようやく握手を求めているのだと気がついた。

「握手してください。未来のピアニストさんと握手したってみんなに自慢するんです」

「まだ将来は決まってないよ？」

「ううん」

頭を振った芽衣が後ろ手に屈みこんで否定する。

そしてくるりと振り向いて道場の外を眺める。

すでに日は落ちて、紅の世界は蒼へと変わりつつあった。

遠い空の向こうはすでに夜の帳に包まれ、暗く落ち込んだ世界に星が瞬き始めていた。

「きつと黒崎君はすごいピアニストになるもん。先生達がね、黒崎君のこと話してるの聴いちゃったもん。だからあたしみたいに音楽のことなんて全然わからない女なんて眼中にないのはわかってたんだ。でもね、一つ自慢話のタネができました。ほら、この手で黒崎君に握手してもらったんだって。何年か先、ううん、何十年経っても自慢できます」

笑って右手を振ってみせる芽衣。

泣いてたのは嘘のようにあっけらかんとした態度だった。

でもわかる、彼女は無理をしているのだと一樹は自覚していた。

「うん……」

「振られて当然。目標がある人って輝いてるんですよ。だからあたしみたいのがカッコいいなー、なんて思ったりして、ご迷惑も考えずに突撃なんかしちゃったりして、運よくば彼氏、なんて妄想しちゃったりして。ドキドキして、初めての告白で、来ないんじゃないかって不安で、嫌われてたらどうしようって、あんな手紙出すんじゃないなかったって……」

勢いよく吐き出した言葉は次第に尻すぼみになり、最後の言葉はかすれてようやく絞り出した声になっていた。

俯き震える肩が痛々しかった。

彼女を振った僕に慰める権利などなく、ただそつとその肩を抱きしめてあげることしかできない。

最初はビクリ、と反応するが嫌がる素振りは見せず、芽衣は一樹の腕を受け入れていた。

ずずつと鼻を噉って泣く芽衣、女の子の見つともない姿を見るのは良くないと、一樹は天井を見上げて腕の中の少女が落ち着くのを待った。

「訊いてくれる、結城さん」

「はい？」

赤く腫らした目で一樹を見上げる芽衣。

「僕には越えたい人がいる。その人はいつも近くにいて、でも手の届かない一番遠いところにいた。その人に近づきたくて、ずつとずつとピアノ三昧を送って来たんだ。今はようやく、手が届くかもしれない入り口に立ってる。そんな気がするんだ」

「はい……」

「だからその、結城さんは可愛いし、性格もいいし、意外とお喋りだけど、僕みたいなピアノ馬鹿じゃなく君を見てくれる人と付き合

う方がいいよ。うん、僕はこんなだしね」

「へ？」

ときよとんとする芽衣だが、次にはブーという不満顔をしてみせる。

表情のくるくる変わる少女だった。

「あたしお喋りですかあ？」

「えーと意外と……」

男子学生の妄想なんだけどね、と一樹は心の中で付け加える。

「まあいいですけど、黒崎君はあたしの憧れの人って位置づけでいいですか？ 好きな人には変わりないけど、そんじよそこの男子より一段、ううん二段くらい上かなあ。というわけで、何かあったら黒崎君の名前を利用していただきます。ほら、男よけて言うんですか？ さすが、名前だけであたしを守ってくれるすごい男なんですー、みたいな？」

ニンマリ笑って、芝居がかった仕草で軽くステップを踏んでみせる芽衣。

前言撤回。

すごいお喋り、というか弾丸トークでした。

しかも利用宣言までされてしまうわけで、でも何故か悪い気はしなかった。

「そんなのでよければどうぞどうぞ。借金の名義と保険金には貸さないけどね」

「それは残念、黒崎君の指は高いよね」

そう言って、芽衣が一樹の指にその細い指を絡ませていた。

「この指で天下を取るんだねえ」

天下という言い回しにおかしくて一樹は笑う。

芽衣の手の温もりが柔らかく暖かい。

正面から見上げる形で芽衣の顔がすぐ目の前にあった。

「絶対にピアニストになれるおまじない、あたしがかけちゃいます」

「おまじない？」

「うん、絶対叶うんだから」

「いいね。どんなの？」

いたずら気に笑う彼女に一樹は問い返す。

「黒崎君、目を瞑ってくださいーい」

能天気な芽衣の声に言われるがままに一樹は目を閉じていた。

一樹の手を握る芽衣の手が離れ、シャンプーの匂いだろうか、女の子特有の甘い香りをかいでいた。

肩にその手が回され、のしかかる体重に一瞬よろめくが、彼女の腕を軽く掴んで押し留まる。

柔らかい女の子の肉体を受け止めた格好で目を開くべきか迷うが、咽喉元に熱い息が吹きかかるのを感じて慌てていた。

「あの、結城さ……」「黙って」

高鳴る胸の鼓動はこの状況からの解放を訴えるようにドクドクと波打っていた。

唇に柔らかい肉の感触を押し付けられ、その唇の甘美な感触に、一樹はその瞬間酔っていた。

芽衣のキスを受け入れたまま動けないでいた。身じろぐ腕の中の芽衣、一樹は体勢を楽にしようと身体を動かす。衣擦れの音と共に唇の感覚は失われて、正面からお互いの顔を見詰め合っていた。

「あたしのファーストキス、黒崎君に上げちゃった」

片目を瞑ってみせる芽衣、何かを言おうと口を開いた唇にその指を一本立てて、一樹の言葉を奪っていた。

猫のような瞳が暗がりにも光る。

「内緒です。キスを盾に恋人になれとか言いませんから」

「結城さん……」

すると芽衣は唇を尖らせる。

それが先程のキスを思い起こさせて、一樹は再びドギマギしていた。

「結城さんってなんか他人行儀だね。芽衣って呼んでみて」

「でも」

「でもも案山子もありませんー」

腰に手を当てる仕草をする芽衣。

一樹は躊躇いながらも言われたとおりにすることにした。

「あー、うん。その…芽衣？」

「はい。あたしも一樹君って呼んでもいいですか？」

「いや、何故そこで敬語に……」

「いいでしょう。えと……か、一樹君」

二人顔を見合わせてお互いの名を呼び合う。

ごく当たり前の光景のはずだが、それまで距離のあった二人が近づいた証の儀式のようなものだった。

昨日まではごく普通のクラスメイトで、みんなの憧れの女の子だった。

僕に告白をしてきたその日、「僕達」はお互いに初めてのキスをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2109z/>

Pianissimo Rhapsody

2011年12月8日04時14分発行